



巻 頭 言

最近とくに思うこと

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事長
 社団法人 日本植物防疫協会 理事長 **梶原 敏宏**

つい先日、北朝鮮に対して日本から30万トン米を供与するというのが大きな話題となった。一昨年の大冷害の際緊急輸入した外国産米がその対象になった。このほかにも、既にネパール、ラオスに各3万トンを供与することが決まっており、フィリピンも昨年の干ばつによる米不足から22万トンの緊急輸入を計画しているという。また、これまで2年続けて150万トンの米を輸出していた中国が、一転して本年は150万トン輸入すると予測されている。1980年代に米の自給を達成したというインドネシアも昨年90万トンを輸入、本年も100万トンを輸入する見込であるという。FAOによれば、このところ米の在庫率が減少し、世界の消費に対する安全在庫率17%を割ったとのこと、このところ世界の米の需給に不安を告げる報道が相継いでいる。

米だけでなく、世界の人口の爆発的增加により、21世紀早々には、主食となる穀類が不足するという見解が、国際農業研究協議会(CGIAR)の閣僚レベルの会合や、国際食料政策研究所(IFPRI)などから明らかにされている。

わが国では、一昨年の大冷害による米不足で大騒ぎしたものの、昨年の豊作やウルグアイラウンドの締結により米のミニマムアクセスの受入れが義務づけられたこと、さらにまた国民1人当りの年間消費量の減少もあり、当面の米の過剰とコスト高をどのようにして乗り切るかの方が緊急の課題になっていて、将来の穀類とくに米の不足に対する懸念は今のところ影が薄い。

世界の米の栽培面積は約1億5,000万ha、1995年の生産は5億3,600万トン(粳)で精米に換算すれば3億5,000万トン。消費の見通し

は3億6,000万トンで、生産量より消費量が1,000万トン上廻ると予測されていて、現在の状況が続けば、現在の世界の米在庫量(約5,500万トン)をここ数年のうちにすべて喰い尽すという勘定になる。とすれば、世界的に米の増産を図る必要があることは自明で、国際稲研究所(IRRI)は35年後の2025年には7億6,500万トン(粳)の生産が必要であると警告している。

現在の米の栽培面積の89%、生産量の92%はアジアで占めているが、今後アジアでどの程度の水田面積の増加が望めるだろうか。現在アジアの稲作面積の半分近くは深水地帯あるいは棚田で、水田面積は極限に近い状態にあり、これ以上面積をふやすことは至難と思われる。中国、インドネシア、タイなど工業化によって、かつて生産性の高かった水田が次々に失われていて、むしろ減少する可能性の方が高い。アジア以外の国々では若干の増加は可能かも知れないが、私の知る限りではあまり多くは期待できそうにない。

とすれば、現在の水田単位面積当りの収量をふやすより解決の道はない。新しい技術によって、さらに高収量の品種の育成や灌漑施設の整備も急務であることはもちろんであるが、生産可能量の35%に達する病害虫・雑草の被害をどの程度少なくすることができるかが、米の需要量確保のキーポイントになるように思われてならない。被害を皆無にすることは不可能であるが、被害を半減することができれば、1億トン以上の米の増収が可能になる。このように考えると、今後稲作における植物防疫の比重は益々大きくなると思われる。